京都府推進委員会委員長（京都府知事）賞

対話がともす心の明かり

精華町立精華台小学校　六年　羽島　梨扇

私は塾に行く時、一人でバスや電車などの交通機関を利用しています。数年前に引越してきましたが、前の学校で爆破予告事件、それに同調した別の犯人からの小学生殺傷予告事件があり、数週間に渡って親に送迎してもらい登校するという事がありました。私にとって、「犯罪」は被害者になるかもしれないという脅威を与えるものであり、常に不安をもって身近に感じながら生きてきました。

そして最近、私の利用している駅で、刃物を持った不審者のニュースが話題に上がりました。常に被害者にはならないように頭では考えていたものの、身近で実際に事件が起きると、大きなショックと衝撃を受けました。もし、自分が被害者になっていたらと考えると背筋が寒くなります。たとえ命が助かったとしても、そのことを一生忘れられず、心から笑えなくなるかもしれません。また自分ではなく大切な家族が被害に遭うようなことがあれば、普通の生活にもどることなんてできません。犯罪は、その人の物や命だけでなく、周りの人の幸せや生きる喜びまでもうばってしまうのです。

だから犯罪を未然に防ぐことは、とても重要だと思います。しかし、犯罪の原因は実に多様で、犯罪を犯してしまう人の根本的な原因を全て取り除いてあげることはできません。でも、身近な人を見守り、異変に気付いてあげること、そして手をさしのべることは、私たちにもできます。

私には手をさしのべてくれる家族や友達、先生がいます。困ったことや悩みがある時、私の様子に気付いて、

「どうしたの？大丈夫？」

「できることはある？」

と、声をかけてくれたり、話を聞いてくれたりする人がいます。そして間違ったり失敗したりしても励まし、受け入れてくれる人がいます。この小さな優しさや気づきこそが今社会に必要なのではないでしょうか。ある人が犯罪に手を染めてしまう前に誰かが話を聞くだけでも、安心感を与えられると思います。その人に寄りそい、励ましてあげられる、そんな気づかいのできる人になりたいし、そんな人であふれる社会であれば犯罪を減らせると思うのです。では、どうすればそのような優しさや気づかいを示せるでしょうか。

近年、バスや電車、飲食店など、場所を問わず、スマホに目を向けている人ばかりが目につくようになりました。また、ＳＮＳの普及によって、つながる世界も増え、同じ事に興味を持つ仲間を増やすことができる一方で、隣に座っている身近な人との会話はずいぶん減ってしまったと思います。ネット上でつながることは便利ではあるけれど、直接人と人とが話すことの大切さ、その重みを感じることこそ、今の私たちに求められていることなのだと私は思います。周りの人の顔を見て話したり、あいさつをしたりすることで、異変にも気付くことができ、

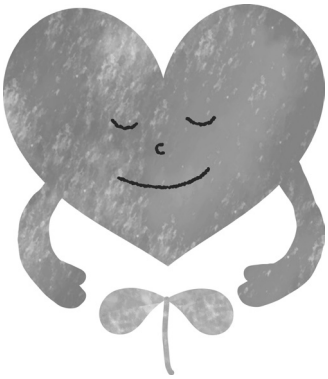
「大丈夫？」

などの声がけにつながります。そしてそれが誰かの心の支えになったり、自分は一人じゃない、という安心感を生んだりすると思うのです。一人一人の優しい心のこもった生の言葉が、人々の心に明かりをともし、社会を明るく導く一歩になると思います。

審査員からのメッセージ

作者が引っ越し前の学校で経験した爆破予告事件や、利用している駅で起こった事件から犯罪の被害者になってしまうかもしれない不安や、スマホが普及したことで会話が減ってしまった社会に対することなど、作者の経験や身の回りのことを通した考えが述べられ、最後の一文までの展開が流れるように進み、非常にまとまりがあり、読み手の心に響く作品でした。

特に題名「対話がともす心の明かり」は作品を一言で表すに相応しくよく考えられていると思いましたし、私たちはどうすれば良いかという部分まで深く考えられていると思いました。



京都府推進委員会委員長（京都府知事）賞

どんな時でも心を繋げて

京都市立美豆小学校　六年　土田　杏

私は、どんな時でも心を繋げることが大切だと思います。

ある日、私は友達に、

「ざこ、弱いな。」

と、いけないことを言ってしまいました。遊びに夢中でつい言ってしまったのです。すると友達は、

「そんなこと言わなくていいじゃん。」

と言い、帰ってしまいました。いつもわいわい遊んでいたはずが、次の日の学校では一言も話せないし、その友達に近づくこともできませんでした。次の日も、その次の日も。四日程経った頃、思い切って、

「前はごめん。」

と言ってみました。私はその時、友達がしばらく黙っていたので、これは許してもらえないな、また一歩も近づけない日々が続くのか、と友達の意見を聞かず、あきらめていました。でも、友達がやっと口を開いて、

「うーん、別にもう気にしてないし。」

と言いました。私は無理に言っているんだな、距離はとられるかなと思いました。

私は、今までいじめなどはやられた側の心にすごくキズが残ると聞いていました。しかし、私はやった側も心にキズが残ると思いました。その後もずっと友達のことでもやもやしていました。しかし、友達はいつもの生活のように私を遊びに誘ったり、たくさんしゃべったりしてくれました。私は友達に、

「私は悪いことしたのに、私と遊んでいていいの？」

と聞きました。すると、

「私だって、いけないことするし、いけないことも言うもん。」

と笑顔で言ってくれました。私は、嬉しくて涙がこぼれそうになりました。そして、いつもの生活を取り戻していきました。

私は、この経験を通して、友達にいけないことをされても、「心を繋げることを大切に」ということを、毎日自分に言い聞かせています。心を繋げるということは、お互い様という気持ちや寛容な心を一人一人がもつことだと思います。しかし、心にダメージが残るようなことをされて、許せないと思うし、それほどすぐに心を開いて繋がるということは無理だと思います。私だって無理です。しかし、ずっと許せないままでいても、やった側の人もやられた側の人も、心の中のもやもやが取れないままで、すっきりしないと思います。ほんの少しでもいいから寛容でいることで、心はもやもやせず、やった側はいつもの生活に戻り、心を入れ替えられるかもしれません。こういう時には、「お互い様」という言葉も大切になってくると思いました。

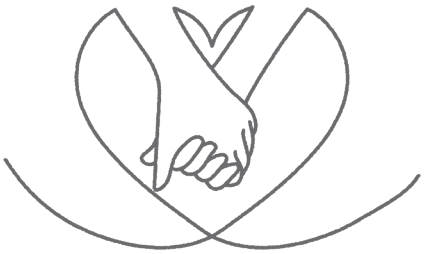
このように、誰かに許されるということは、とても大切だと思います。私は喧嘩をよくしますが、喧嘩したみんなは毎回許したり、許されたりしています。しかし、非行やいけないことをした人が皆、許される訳ではないかもしれません。犯した罪によっては、許せない人がとても多いと思います。しかし、悪いことをしたからといって、縁を切ったりするのではなく、心が一生繋がったままで過ごしていくと、今の社会が明るくなるのではないでしょうか。

私は、心を繋げるということを日々、大切にして過ごしています。貴方も、何か嫌なことをされたときは、無視をしたり、仕返しをしたりするのではなく、心を繋げてみてはどうでしょうか。

審査員からのメッセージ

最初に「どんな時でも心を繋げることが大切だと思います」という考えを端的に述べ、その後作者が友達に言ったインパクトのある言葉から始めたことで、非常に作品に引き込まれました。

友達に対して悪口を言った経験を通して、自身が感じたもやもや、意を決して謝り、許してくれた友達の言葉と込み上げてきた思いなど、その情景が思い浮かび、表現力豊かに書かれていたと思います。そしてこの経験を通して、犯罪や非行を起こした人に対してどうしたらよいかと深く考えられていました。



京都府推進委員会委員長（京都府知事）賞

明るい未来を作ろう

木津川市立州見台小学校　六年　石塚　陽奈子

みなさんは、自分の日常生活で社会を暗く感じる瞬間はありますか。例えば、事件等のニュースなどを見たときに、社会を暗く感じる事はありませんか。私はそういった事件等のニュースを見ると、社会を暗く感じることがあります。その他の例では、格差の拡大、将来への不安、人間関係のストレス、社会の不公平感などが挙げられます。私は、このような事をなくし、犯罪や非行のない未来にするにはどうすればいいのかを考えてみます。私は日常生活の中で、特にＳＮＳやニュースを見るときに社会の暗さを感じることがあります。たとえば、ＳＮＳ上で他人の失敗に対して、沢山の人が心ない言葉を投げかけているのを見た時です。内容によっては軽い冗談に見えるかもしれませんが、言われた本人にとっては深く傷つくことだと思います。私自身も、以前ＳＮＳで好きなキャラクターの感想を書いたときに、「センスがない」などの否定的な反応をもらったことがあります。たった一言でも、しばらく落ち込んでしまったことを覚えています。

また、ニュースでは、さまざまな非行や犯罪が報道されており、「なぜこんなことが起こるのだろう」や「何故防げなかったのだろう」と考えさせられることが多くあります。特に、子どもが被害にあった事件や、未成年が加害者になっている事件を知ると、私たちと同じ様な世代でも道を間違えてしまうことがあるという現実に、不安を感じることがあります。こうした報道を見ていると、社会は冷たく、他人を助ける余裕のない場所のようにも思えてしまうことがあります。

このようなことから、私が感じたのは、非行や犯罪は、ただ、「悪いことをする人がいる」から起きているのではないということです。もしかしたら、その人がずっと一人で悩みを抱えていたり、誰にも助けてもらえなかったりした結果、そうした行動に出てしまったのかもしれません。

つまり、非行や犯罪をなくすためには、まずその人が孤独にならないような社会をつくることが大切なのではないかと思いました。

では、私たちにできることは何か。

それは、小さな気づかいを忘れずに、周囲に目を向ける事だと私は、思います。たとえば、ＳＮＳでも悪口やからかいにのらないこと、困っている人に「大丈夫？」と声をかけること、人の気持ちを考えて言葉を選ぶことなど、日常の中でできることはたくさんあります。それぞれは小さな行動かもしれませんが、そうした優しさの積み重ねが、誰かを救い、非行や犯罪を防ぐことにつながるのではないかと私は考えます。

私は、たとえ小さなことでも、人を傷つけない言葉を選ぶこと、そして相手の気持ちを想像することを大切にしていきたいです。社会を明るくするには、まず身近な言動から見直すことが必要だと感じました。誰かを攻撃するのではなく、支えあえる関係が広がることで、少しでも非行や犯罪のない、安心できる社会になってほしいです。

みなさんがこのような事に気をつけて、一人一人がそれを意識することで、明るい未来へと変わっていくのだと思います。

審査員からのメッセージ

非行や犯罪を無くすための作者の考えが一貫して述べられ、自分たちに何ができるか深く考えられていました。

また、「社会を暗く感じる瞬間」の読者への問いかけから始まる構成は、内容に引き込まれていきましたし、さらに先に思考を進め、自分にできることが何かを考え、小さな気遣いや言葉選びなど優しい行動を積み重ねていくという具体的なことを考えられていたことも素晴らしかったと思いました。